

あおつゆ／新緑に降りそそぐ雨。青葉が濡れていっそう緑が濃く見える。梅雨の季節は、お日さまの見られない日も増えるけれど、雨を受けた木々は、はつらつとして葉の色を濃くさせる時期でもある。

らしく

自分らしく、
粋なくらし

CLOSE UP

「平和」とは何か、今考える 広島から伝えるメッセージ



CLOSE UP 01

世界の子どもの平和像をつくる会ヒロシマ
平和像の建立をきっかけに、
広島から世界へアートを通して平和を発信



CLOSE UP 02

特定非営利活動法人 I PRAY
子どもを中心に、幼児から大人まで出演する
平和創作劇・ミュージカル

連載

- ▶らしくレポート・広島から世界へ。～被爆都市ヒロシマの復興から学び、世界の平和を創造する人を育む～
- ▶らしくコラム・あらためて「平和」とは何かを考える ▶人材バンク 名人 宝人 達人 ▶Hmi助成団体決定!
- ▶ようこそ!公民館へ～西区内公民館～ ▶まちづくり市民交流プラザ2022フェスタ ▶情報の森 ▶プラザ通信



平和像の建立をきっかけに、 広島から世界へアートを通して 平和を発信

BODY MAPワークショップの様子(令和3年)

CLOSE UP

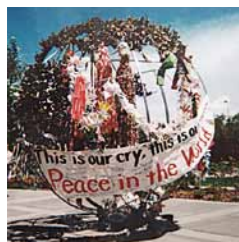
「平和」とは何か、今考える 広島から伝えるメッセージ

21世紀になった今も世界で起きている紛争や戦争。平和とは何か、今こそ考えてみませんか。今回は、被爆地ヒロシマから平和へのメッセージを伝えている団体をご紹介します。

世界の子どもの平和像をつくる会ヒロシマ

世界を平和にしようと行動した、アメリカの少年

佐々木禎子さんの本を読んで、「原爆の子の像」(サダコ像)に感動したアメリカの少年トリス・ブランスコム君(当時13歳)は、1995年(平成7年)、6年の歳月をかけてニューメキシコ州アルバカーキに「世界の子どもの平和の像」を建立しました。その1年前、彼は日本を訪れ、広島、京都、東京で建設費用のための募金を呼びかけ、その支援のために集まった有志約10人で「世界の子どもの平和像を広島につくる会」は設立されました。



▲アメリカニューメキシコ州アルバカーキにある「世界の子どもの平和の像」

平成8年に広島で行われた「全国高校生平和集会・広島大会」に参加したトリス・ブランスコム君は「世界中に『子どもの平和の像』を建てるのが夢です」と訴え、その呼びかけに賛同した日本全国の若者も立ち上がり、募金活動やピラ配りをしながら、平和を訴え続け、日本で初めての「世界の子どもの

平和の像」が東京に誕生しました。平成13年、東京に続き2番目に広島(中区基町・旧広島市民球場前)に像が建立されました。「手をつないだ両親に駆け寄り子ども」の姿をイメージした大小二体の像です。

平成14年には東京都江東区にある、東京大空襲・戦争資料センター前に、平成15年には京都市内にある立命館大学国際平和ミュージアム内にと、その活動は全国に広がりました。

世界の子どもの平和のための美術展

像建立後は「世界の子どもの平和像をつくる会ヒロシマ」に名称を変え、新たな活動を模索し生まれたのが「せこへい ART MUSEUM 美術館」です。世界の「せ」、子どもの「こ」、平和像の「へい」を



▲「せこへい ART MUSEUM 美術館」の様子(令和2年)



▲広島にある「世界の子どもの平和の像」

つなげた略称「せこへい」の愛称で親しまれています。この美術展は平成15年に始まり、毎年8月6日前後に旧日本銀行広島支店を展示会場の中心として(開催場所は毎年異なる)、核や戦争のない世界の実現と世界中の子どもたちの幸せを願って広島市内で開かれています。令和3年はコロナ禍で来展者は400人ほどに留まりましたが、毎年1,000人近くが訪れているそうです。

このせこへい美術展は、広島市内10校の高校生約40人が参加しているグループ「広島高校生平和ゼミナール」の皆さんの作品を中心に、子どもから大人まで世代を超え、絵や書、写真など幅広いアート作品を展示。その輪は、日本国内に留まらず、紛争が起きている国の子どもの作品にまで広がっています。

広島高校生平和ゼミナールは、近年一学期に2回のワークショップを実施。広島大学の協力を仰ぎ、畳一畳大の紙に自分の体の輪郭を型取るBODY MAPを作成しています。生まれ故郷、将来のビジョン、身体で感じる苦しみや希望、支えなどをマッピングして一枚の絵に仕上げます。2年前には、被爆者から被爆体験を聞き、その方のBODY MAPと一緒に作ろうとしましたが、コロナの影響で断念。しかし今年、コロナ感染に注意しながらワークショップを行っています。「被爆者のBODY MAPを計画しながらも諦めざるを得なかった先輩方の思いを胸に、実現できる喜びを噛みしめ全力で取り組みたいと思っています。広島から日本へ、世界の人々にアートを通して平和を発信できれば」と広島高校生平和ゼミナールに参加する安田女子高等学校2年生の津田真希さん。同高2年生の石戸菜月さんも「広島では当たり前だった平和学習も、広島高校生平和ゼミナールに参加してもっと色々と知ることができました。オンライン交流を通して全国の人たちとも交流を持つことができ、表現の幅や視野が広がったと思います」とやりがいを感じています。このように、せこへい美術展には、子どもたちの考える平和への願いやメッセージがあふれています。令和4年は、7月26日から31日までの6日間、広島県立美術館・県民ギャラリーで開催されました。

「毎年、新しく参加する高校生とアーティストが一緒になって、創造的な作品を作り、せこへい美術展に繋がる醍醐味は圧巻です。これから、広島の子どもたちが被爆体験を継承し、どう伝えていくのか。今後も、核兵器のない平和な世界を実現するために、アートを通して願いを表現していきたいと思っています。そのためにも、もっと世界の子どもたちと交流ができればいいですね」と現在の事務局局長望月照己さんは今後の展望を語ってくれました。

自分らしく、 粋なくらし

contents

Vol.63
青梅雨号
2022.7

特集

01 「平和」とは何か、今考える 広島から伝えるメッセージ

▶世界の子どもの平和像をつくる会ヒロシマ



「せこへい ART MUSEUM 美術館」の様子(令和元年)

▶特定非営利活動法人I PRAY



舞台上で印象的な子どもたちの輝く笑顔

04 らしくレポート ひろ記者が行く

▶広島から世界へ。～被爆都市ヒロシマの復興から学び、世界の平和を創造する人を育む～

らしくコラム

▶あらためて「平和」とは何かを考える
広島大学平和センター
川野 徳幸 センター長・教授

05 人材バンク 名人 宝人 達人

▶胎教アドバイザー@special 杉原 美代子さん
▶絵本の読み聞かせ講師 藤原 美香さん
▶ひろしま地歴ウォーク伝播局

08 Hm助成団体決定!

09 ようこそ!公民館へ

▶西区内公民館

10 まちづくり市民交流プラザ 2022フェスタ

11 情報の森

15 プラザ通信

子どもを中心に、幼児から大人まで出演する 平和創作劇・ミュージカル

特定非営利活動法人I PRAY

<https://ipray.jp/>

平和な未来へ願いを込め 「あの夏の日」を伝える

一般公募で集まった子どもたちを中心にした平和創作劇「I PRAY」は、平和の大切さと戦争のない未来を願い、原爆が落ちる前の広島、原爆が投下された広島、復興の広島を演じるミュージカル。特定非営利活動法人I PRAYは平成8年に設立しました。きっかけは27年前、ダンススクールで300人もの子どもたちを指導していた、総合プロデューサー木原世有子さんのもとに、「全国連合平和集会で、平和をテーマに子どもたちと何ができないか」という依頼が届いたことからでした。幼少期より祖母や母から原爆の体験談を耳にしていた木原さんは、同じ人間同士が傷つけあう悲劇が二度と起こらないように、これからの未来を作っていく子どもたちとともに訴えよう、と活動を始めました。

「ミュージカルに出演する子どもたちにはまず、戦争の恐ろしさを伝えています。『生きていることが苦しい』と考えてしまうほど、壮絶な時代を生きた人々の気持ちに少しでも寄り添えるように、想像力を働かせて常に自分に問いかけるよう意識すると、最初は引込み思案だった子どもも稽古を重ねるうちに自己表現ができるようになってきます」と木原さん。

仲間と舞台を作る感動を体験し、 平和の尊さを学ぶ

27回目の令和4年は8月4日広島YMCA国際文化センターホールで公演します。本番に向けて子どもたちの士気も高まっています。なかには10年以上参加している子どもや、親子で参加する人もいます。趣旨に賛同した仲間で作る平和のメッセージ。舞台



▲ I PRAY特別顧問広島市長松井一實氏と記念撮影

上でのキャストの輝く笑顔が印象的です。「毎日平凡で、何も起こらなくてつまらないと思うこともあるでしょう。でもね、それがどんなに幸せなのか、この子たちはミュージカルに出演することで体現します。だから体の奥底から湧き出るパワーで演じることができるし、こんなにもいい表情になるんです」と誇らしく話す木原さん。「子どもたちはいろんな経験をした方がいい。その経験の積み重ねで親に感謝する瞬間があったり、諦めない心を学んだりできる。気持ちさえあればできないことはないと思います。自分の強い心で決めたら何でもできるんです。だからまず、やると決める。そうするとおのずと道が照らされると信じています」とダンスや演技の稽古を通して諦めない心も伝えています。

残念ながら現在も戦争は無くなっていません。悲しみのない平和な世界と、未来を担う子どもたちの笑顔のため、メッセージを発信続ける皆さんの活動はますます重要になってくると感じました。

令和5年も公演予定。子どもたちの笑顔をなくしてはいけない、その一心でI PRAYはこれからも歩み続けます。出演希望や興味のある方は、ホームページからお問い合わせください。



▲ 令和4年の出演者募集チラシ



▲ I PRAY公演の様子

らしくレポーター3記者が行く

今回は、「国連ユニタール広島事務所」について取材しました。

広島から世界へ。～被爆都市ヒロシマの復興から学び、世界の平和を創造する人を育む～ レポーター ひろ記者 津森正裕、高村秀樹

中国四国地方唯一の国連機関である国連ユニタール広島事務所、広報チームリーダーの守田葉子さん、広報アシスタントの田島マリーメイさんに、事務所と活動の概要をお聞きしました。



▲田島さん(左)と守田さん(右)

国連訓練調査研究所 United Nations Institute for Training and Research

研修などの能力開発事業を通じて、開発途上国の国づくりを支える人材の育成をはかる国連機関です。本部はスイス・ジュネーブにあり、ニューヨーク、広島、ボンに事務所があります。広島事務所は2003年に設置され、2020年度は1,800名以上の後発開発途上国の人々などに研修を提供しました。

「世界平和」、「持続可能な繁栄」などにつながる、起業、リーダーシップ、貿易・金融、デジタル技術、軍縮などの知識や技術の共有を進めています。たとえば、「津波防災に関する女性のリーダーシップ研修」は、太平洋地域の島国で防災に取り組む女性リーダーたちに、地域の避難訓練など、日本のさまざまな防災・減災の活動を知ってもらい、女性の視点を生かした防災について考えてもらうプログラムです。トンガからの参加者からは、今年の火山噴火後の迅速な避難につながったと連絡を受けています。

広島事務所では、紛争中や紛争後復興の過程にある国の人々への

研修も重要視してきました。広島市の立地を生かし原爆投下後から現在の平和都市に至る過程の一つの復興モデルとして研修に組み込むなど、平和で公正な社会の実現に貢献されています。現在はコロナ禍によりオンラインでの事業となっていますが、広島に研修生を招く実地でのワークショップ開催の際には被爆証言を聞き、平和記念公園や資料館を視察するプログラムを設けてきました。

2015年から実施している核軍縮不拡散研修の関連事業として、昨年8月6日には「広島から一核兵器廃絶と持続可能な未来へ」をテーマに、国連軍縮部、広島県、民間企業、高校生など幅広い参加者によるオンライン公開討論を実施されています。今年も企画されているとのこと、ホームページで確認ください。

広島商工会議所ビル5階にあるオフィスからは、原爆ドーム～平和公園～復興した広島市のビル街を眺めることができます。復興途上にある自国の現状を想ってでしょうか、長い時間この眺めに浸っている参加者も少なくないとのこと。

最近注目が高まっている、SDGsの普及啓発にも取り組まれています。SDGs取組のヒントを探されている皆さん、海外に関連する課題解決や平和・平等の取組を考えられている皆さん、一緒に考えてみませんか。

「ひろ記者」とは、市民自らが地域のまちづくり活動やイベントなどを取材し発信していく、広島市の市民レポーターです。

▶ <https://www.city.hiroshima.lg.jp/soshiki/14/7197.html>



らしくコラム Rashikku column

あらためて「平和」とは何かを考える

1950年代後半から60年代前半に誕生したとされる平和学は、その草創期、「平和」を「戦争のないこと」、平和学の用語で言えば、「戦争の不在」(absence of war)と定義づけた。その後、南北問題を契機に、「平和」とは「戦争の不在」ではなく、「暴力」の不在と定義づけた。ここでの「暴力」は、人間に本来備わった肉体的、精神的可能性の実現を妨げるものすべてを指す。換言すれば、「暴力」とは、人間の肉体的、精神的可能性と現実の状態との間に差を生み出すすべてのものを指す。提唱者である平和学の父と称されるJohan Galtungは、その例として先進諸国と途上諸国の平均寿命の格差などをあげてその概念を説明した。このように、平和学は、「平和」の定義を探求し続け、「戦争の不在」から「暴力の不在」へとその定義を発展・深化させ、平和学に新たな地平を切り拓いてきた。それに伴い、平和学の主たる研究対象領域も戦争から開発、そして人権・人間の安全保障、平和構築などへと研究対象のすそ野を広げてきた。しかしながら、今般のロシアのウクライナへの軍事侵攻を受けて、また平和学誕生当時の領域が主流となるのかもしれない。

私たちは「理想」と「現実」のはざまにある。たとえば、核兵器禁止条約を例にとると、多くが「核なき世界」を支持しながら、同時に、「核抑止」は機能すると考え、「核の傘」にある日本政府の立場を許容、あるいは諦観している実態がある。これは、何も多くの日本人に共通する考えではなく、核なき世界を主軸にする平和運動を牽引してきた被爆者にもあるジレンマである。

核兵器に関しては言えば、「核なき世界」が「理想」で、「核の傘」が「現実」と捉えることができよう。今般のロシアのウクライナへの軍事侵攻は、この「理想」と「現実」に大きな影響を与えるのかもしれない。

「理想」のない社会に未来はあるのか。ユートピア的な社会を語ることは、現実的でないという人も少なくないだろう。それであれば、何故、私たちは、例えば、SDGsなる理想を掲げ、「誰一人取り残さない」世界の実現を目指そうとするのか。市民社会の英知の集結であろう核兵器禁止条約は何故、国連で採択され、発効されたのか。現実的でないと、それらを論じることは容易い。しかしながら、「理想」のない、「理想」を語らない社会を次世代に残していいのか。これまで数多の戦争・紛争に対して、相対的に「対岸の火事」として捉える傾向にあったこの日本でも防衛施設庁の定義による武器の供与に始まり、防衛費の増大などの議論も活発化している。あの敗戦を基盤にしたこの国の「平和」は、これからどこに向かっていくのか。私たちは今まさに激動の時代にあり、大きな分岐点に立っている。コロナというパンデミックを経験し、そして、ウクライナへの軍事侵攻の様子を連日目の当たりにしている。今こそ、「平和」とは何か、「平和」を標榜し続ける被爆地は何をすべきなのか、をあらためて考える時である。

(2022年6月25日 記す)



Profile
広島大学平和センターセンター長・教授
川野 徳幸

広島大学大学院医歯薬学総合研究科博士課程修了 博士(医学)。広島大学原爆放射線医学研究所附属国際放射線情報センター助手・助教、広島大学平和科学センター准教授等を経て、2013年6月から広島大学平和科学センター教授。2017年4月より同センター長併任(2018年4月より機能強化のため所属機関名称変更)。専門は原爆・被ばく研究、平和学。

2022年5月19日
共同通信社広島支局撮影